

帝京大学史学科美術史・文化遺産実習2
主催、辻清明「清風庵」茶会報告（令和
五年冬、令和六年夏）

岡部昌幸・鴻村大地 編

帝京大学文学部史学科岡部昌幸ゼミでは過去十年以上にわたって、定期的に茶会を開催している。本稿では令和五年十二月（第三十三回）および令和六年八月（第三十四回）の二回について報告したい。

本茶会は、辻清明氏（一九二七―二〇〇八、陶芸家）⁽¹⁾の旧居敷地内にある「清風庵」にて開催されている。帝京大学八王子キャンパスは一部多摩市に立地している。帝京大学周辺の地域連携プロジェクトの一環として、岡部昌幸（当時、大学院教授）担当の美術史実習・演習の企画で始められたいくつかのプロジェクト

クトの内のひとつである。茶道を体験することはもちろん、茶会を通して辻夫妻⁽²⁾の作品との触れ合いや地域と学生の交流、登り窯と「清風庵」の保存・利用を目的としている。そのため本茶会では作法に拘らず、学生や辻家の方々、客人を交えた愉しさを共有する空間となっている。貴重な茶器や茶室を惜しげもなく使わせていただくほか、開催に際し全面的にご協力いただいている辻家の皆様及び帝京大学裏千家茶道部の皆様そして有志でお力添えをさせていただいている方々に心より感謝を申し上げます。

辻清明旧居の敷地内に存在する清風庵には、三畳ほどの広さの小さな空間が作られている。これは一五八一年頃に確立された「小間」と呼ばれる形式であり、二、三畳の狭い空間や蹴り口と呼ばれる客用の出入り口が存在している。

清風庵は、伝統的な茶室を受け継いでおり、さらに辻清明の工夫や拘りが組み合わさることで独自の空間

を作り出している。本茶会では、茶席や清風庵の建築仕様、その周りの自然環境を間近で愉しむことができる。

開催日

第三十三回 令和五年十二月十日（日）虹の茶会

第三十四回 令和六年八月四日（日）ひなげしの茶会

主催…帝京大学文学部史学科美術史・文化遺産実習

（岡部ゼミ）

協力…帝京大学裏千家茶道部

茶会記（第三十三回虹の茶会）

日程…令和五年十二月十日（土）十三時～十八時

天気…曇り

場所…連光寺坂辻清明旧居 清風庵

運営…岡部昌幸（総括）、鴻村大地（学生代表）、美

術史・文化遺産実習（岡部ゼミ）

参加者…一般人十二名、帝京大学生五名

第三十三回虹の茶会道具立て

亭主 上田和慶

半東 杉本磨洗

床 《虹》 下村観山（岡部コレクション）

花生 織部 辻清明

花 椿

万両の実

風炉 信楽 辻清明

水指 信楽 辻清明

茶碗 唐津 辻清明

平茶碗三点 辻清明

八寸 灰釉 辻清明

棗

建水 木製 辻協

御茶 式部の昔 山政小山園

菓子 おとき草子 吉廻家

床 下村観山《虹》

材質・技法…紙本彩色

本作は雨上がりの直後を描いた作品となっている。付けたて技法で描かれた雁（雁行）が手前の山から飛び立っている。右側に描かれた「虹」は写實的に描かれており、人の視覚的観点を上手く捉えられている。複数色で描かず、赤系（朱または橙）と青系（群青と思われる）で表現されている。左奥に描かれた山は薄い群青色で、手前の山との距離が取られていることがわかる。

本作の作者下村観山（一八七三―一九三〇）は明治から昭和初期にかけて活躍した日本画家である。狩野芳崖や橋本雅邦そして東京美術学校に入学後は岡倉天心から絵を学ぶようになる。

観山は天心を敬愛し、狩野派だけでなく、やまと絵や琳派の手法を取り入れるといった幅広い表現を積極的に学んだ。観山は、特に古典的な絵画技法に長けており、彼の手による日本古典絵巻やラファエロの聖母子像などの精密な描写でその力を発揮している。

共箱には、「虹 下村観山必」と記されている。中心付近に縦の折り線があるため元々は画帳だったものを掛け軸にしたと思われる。

作品は紙本彩色であるが、本紙以外は絹でできている。また風帯がないことから、茶室や床の間用の掛け軸として再編されたと思われる。

制作年代は記載されていないが、作風が一九二六年に観山が描いた《近江八景》と酷似している。また《近江八景》で使用されている落款及び印が、本作の落款と同一であることがわかった。本作が《近江八景》と関連しているかは不明であるものの、おそらく一九二六年頃の晩年に描かれた作品であると推察さ

れる。

また、類似作品として京都三千院の《虹の間》が挙げられる。三千院は京都左京区にある天台宗の寺院である。境内には往生極楽院（重要文化財）と阿弥陀三尊座像（国宝）がある。《虹の間》は観山最晩年の作品で英国のサー・パーシヴァル・デイヴィッドが三千院に寄贈するために製作されたものである。《虹の間》は赤系の色を使用せず、虹を表現している。

茶会記（第三十四回ひなげしの茶会）

日程…令和六年八月四日（日）十三時～十八時

天候…晴れ

場所…連光寺坂辻清明旧居 清風庵

運営…岡部昌幸（総括）、鴻村大地（学生代表）、美

術史・文化遺産実習（岡部ゼミ）

参加者…辻家から三名 一般参加九名 他大学学生二

名、帝京大学生三名（運営メンバー含まず）

第三十四回ひなげしの茶会道具立て

亭主及び半東 上田和慶 田中利久 竹内

天斗

床 《ひなげし》 小早川清 （岡部コレク

ション）

唐津陶缶花入 辻清明

花 百日草

信楽瓢箪付き風炉 辻清明

クリスタルガラス水指 辻清明

クリスタルガラス茶碗 辻清明

クリスタルガラス菓子器 辻清明

漆棗

建水

竹蓋置 木製

鬼灯釜

御茶 九重 芳翠園

菓子

半生菓子 宝来屋

床 小早川清《ひなげし》

材質…紙本彩色

小早川清（一八九九～一九四八）は大正から昭和にかけて活躍した日本画家である。福岡市博多に生まれ、はじめは南画家の上田鉄耕のもとで絵を学んだ。その後一九一五年に上京する。鏑木清方（一八七八～一九七二）に師事し、門下の集う郷土会にて伊藤深水、川瀬巴水らとともに切磋琢磨し、実力を上げていった。小早川清の画業は三〇年ほどで、発表の場は主に帝展、文展、新文展であった。画題は美人画が多く、艶麗でエチゾチックかつ時代に即した女性像を得意とした。一九二四年の第五回帝展にて《長崎のお菊さん》が初入選し、それ以降一九三四年の第十五回展までほぼ毎回入選を続けた。一九三三年の第十四回展では歌手の市丸を描いた《旗亭涼宵》（きていりようしょ

う）《が特選となり、その後の文展では第1回から無鑑査となっている。一方で浮世絵の収集、木版画の制作も行い、一九三〇年から翌年にかけて《近代時世粧》を制作した。さらに一九三二年、版元長谷川から木版画《踊り》《唐人お吉》《ダンサー》を出版。続いて一九三四年には渡邊版画店より《舞踏》を刊行する。以降も文展、新文展に作品を出品すると同時に清方の同門会の青衿会などにも、会員として多くの作品を発表した。

本作は、ひなげしを画題としている。ひなげしは「心の平穩」「別れの悲しみ」「慰め」「休息」等の意味がある。また、ひなげしは、「虞美人草」の別名でも知られている。「虞美人」とは秦末期に存在したとされる項羽の愛人の名である。彼女は劉邦との争いの結果、自害してしまいが、その墓には一輪の花が咲いていたという。その花がひなげしであり、虞美人草の名の由来となっている。

本作では主に鉤勒（こうろく）、付け立て、ぼかしといった技法が用いられている。鉤勒とは描く対象の形態を輪郭線でくくる技法であり、本作の花の部分に用いられている。縁取りがなされていることで花の存在感をより際立たせている。また、実際のひなげしの特徴である黒い粒上のおしべを詳細に描写しており、花卉についても色彩の濃淡によって立体感を表現している。茎の部分には付け立てが用いられている。付け立てとは、下描きや輪郭線を用いず、筆致のふくらみや勢いを利用して描く技法である。曲線的で適度なうねりがあり、茎に生えた棘など細部まで描くことによって立体感を演出している。地面はぼかしが用いられており、実際に生えているものを描いたことを示している。複数の表現技法を用いることで、写実的だが日本画特有のやわらかな作品に仕上がっているといえる。

「おもてなし」の茶会へ

元々、この茶会プロジェクトは岡部教授「地域の文化財を広め、地域おこしに繋げていきたい」という想いから始まった。それに共鳴した辻家の方々を中心に多くの人々に支えられ、今日まで続いている。このようなプロジェクトを長年継続して実施できることは大変素晴らしいことであり、運営側として喜ばしい限りである。

以前は演習（三年生）のメンバーが中心となり、実習（二年生）のメンバーがサポートする形で運営されていた。だが、岡部教授の担当科目変更に伴い令和五年度より岡部ゼミは実習のみとなった。そのため、二年生が主体となり、有志の上級生が指導や補助をする形で茶会が運営されるようになった。

昨冬および今夏の茶会では、辻清明茶会のパンフレットの更新や案内状を新たに制作した。近年の茶会は準備時間がなかなかとれず、急ピッチで仕上げるこ

とが多かった。そのため、大きな改変をすることなく、前例に倣って運営をしていた。だが、昨冬の茶会でパンフレット、今夏の茶会で案内状を制作した。実習の授業として実践的であり、来ていただいた方からも高評価をいただけた。

着実に進化し続けているこの茶会ではおもてなしを大事にしていきたい。客人をもてなすことは周到な準備と気持ちが必要となる。今ができていないわけではないが、より進化させるためには必要なことだといえる。二年生にそのような姿勢ができるように上級生がおもてなしのマインドを伝えていきたい。

ご厚意で茶室や辻清明氏、辻協氏の制作された茶碗を貸して頂いている辻家の皆様、ご協力いただいている帝京大学裏千家茶道部、来て頂いたお客様方に対して感謝申し上げます。

茶室内でのギャラリー・トークの実施と地域交流

コロナ禍により茶会が一度途絶えた後、開催頻度を年四回から年に二回に変更し、二〇二一年から再開した。《虹の茶会》開催以前の茶会において、現場での辻清明や掛け軸の解説は私が担当してきた。しかし、教育普及活動や学生と地域交流、清風庵への理解を深めるため、《虹の茶会》から岡部ゼミの学生には、パンフレットをはじめとした配布資料だけでなく、当日に茶室内で解説をするという課題を設けることにした。岡部ゼミには、学芸員資格課程を履修している学生も多い。外部でのギャラリー・トークは学生の成長に良い影響を与えると考えたためである。《虹の茶会》で展示した掛け軸は、近代日本画家の下村観山作であり、観山の展覧会図録や先行研究も豊富であった。初めてギャラリー・トークを行う学生にとってもハードルが低いということもあり、《虹の茶会》からの実施を決めた。また、茶会で参加される方の中には、美術

館での学芸員経験者や美術史家の方も多い。茶室内でギャラリー・トークを実施することで、学外の有識者からの指導も受けられるという狙いも含んでいる。勿論、美術に初めて触れる他専攻の学生や一般の方もいるため、教育普及活動や地域交流の一環としても、茶室内のギャラリー・トークは非常に有効である。《虹の茶会》では、学生代表を務める私と、当時学部三年であった小山将嗣さんが担当したが、《ひなげしの茶会》からは学部二年生にも担当してもらった。参加した方々からは好評であり、学生のコミュニケーション能力向上にも繋がった。そのため、今後もギャラリー・トークを実施していく方針となった。

また、ギャラリー・トークと並行し、辻清明・辻協の作品をもっと多くの方に認知していただくため、私が所蔵している辻清明・辻協の作品を展示する活動も実施している。陶芸家と聞くと茶器や食器を連想する方が多い。しかし、辻清明・協の作品には笛型のカト

ラリーや蝶のオブジェなどユニークな作品も多い。茶会だけでなく、作品を通じて辻陶房の魅力を感じてほしいという狙いで展示を昨年から続けている。現状、作品の解説は私が担当しているが、次回以降からは学部生に解説してもらおうと思っている。それには相応な準備が必要となるが、学生の能力向上と地域交流を活性化させるためには必要なことと考えている。

(帝京大学大学院文学研究科日本史・文化遺産学専攻
博士前期課二年 鴻村大地)

茶会プロジェクト感想

私は二年生のときにはじめて茶会に参加した。当時学部四年生だった鴻村大地さんの指示を仰ぎつつ、緊張しながらも充実した時間だったことを今でもおぼえている。その後も参加し続け、今では後輩に指導している立場にある。

なぜ茶会プロジェクトに参加し続けているか。それ

は茶会の空間が心地よいからだ。多摩の自然に囲まれ、季節を味わうことができる。毎回季節や参加者で雰囲気が変わるため、同じ茶会はなく、新鮮に感じる。また、辻清明の茶器や岡部先生所蔵の掛軸を拝見することができるのはかなり魅力的だ。そんな魅力に惹かれるとともに多くの人にその魅力を伝えたい気持ちで運営に携わり続けている。

上級生となり、運営で指導的立場に立つことが多くなった。作業の分担やアドバイスを主に行っているが、これがなかなか難しい。茶会の準備は授業だけで済ますことはできない。学生の空き時間を借りて作業をしてもらうことになってしまう。もちろん協力してくれる学生もいるが、そうでない学生もいる。どうしても積極的に動いてくれる学生への負担が大きくなってしまい申し訳ないと感じている。だが、そんな学生は茶会の準備や運営、当日参加し、間違いなく成長している。上級生として迷惑をかけたにもかかわらず、

文句一つ言わず作業をしてくれた後輩に感謝する。

最後に大学院生の鴻村さんは誰よりも茶会を成功させようと自分や後輩のサポートをしてくださっている。そして岡部昌幸先生は茶会プロジェクトの意義を大切に考えており、その姿勢を私たちに伝えてくださっている。お二方に感謝するとともに力になれるよう精進していきたい。

（帝京大学文学部史学科四年 小山将嗣）

お茶会には初めての参加でした。真夏日のなかクーラーのないお茶室や旧邸宅は暑いのだろうかと思像していました。が、実際に伺ってみると林立した木々のなかに静謐な雰囲気が漂う空間のなかにあり、そこだけ異世界のように感じられ、暑さも全く感じることはありませんでした。お茶会の作法も不慣れでしたが、亭主の方が緊張をほぐせるように努めて下さり、朗らかな雰囲気を作り出して下さったため、そういったお心

遣いが相俟ってよりお茶会を楽しむことができた。また、お茶室に掛けられている小早川清の《ひなげし》は、お茶室の主人そのもののように存在感がありました。特に鉤勒で描かれた花の存在感や、明るい色使いは、お茶室に訪れた人々を穏やかに迎え入れ、緊張しないように包み込んでくれているように感じました。茶花である百日草は、夏の暑さに強い百日草らしく生命を感じる一方で午後四時過ぎということもあり、少し元気がないように感じました。しかし、その状態こそが、生命のうつろう姿が茶室に取り込まれているように思い、千利休の言葉とされる「花は野にあるように」というものを表しているような気がし、感動しました。

茶器は、クリスタルガラスのものが印象に残りました。夏らしく爽やかさがあり、見ているだけで清涼感を感じることができました。茶器の影も透明感があり、水面に差す光のように思い、お茶会は季節や気候に合

わせ非常に細かい部分まで真心を込めて準備するものなのだと学ぶ事ができました。菓子も色とりどりで華やかさを感じました。私が頂いたものはピンク色だったのですが、茶花である百日草もピンク色のものがあつたため茶花を眺めながら美味しくいただくことができました。今までお茶会の印象は厳かで亭主が淹れたお茶を飲むというイメージしかなかったのですが、今回初めてお茶会に参加させていただき、お茶会はただお茶を飲むものではなく、茶室の茶器や掛け軸、茶花の準備からその時々のお雰囲気作りまで、そこには関わる人々の心遣いが重要であることを知りました。また、茶室がある場所も重要であることを学びました。私が日々暮らす都会の喧噪とは異なり、静謐で自然溢れる空間は生命力と穏やかな空気を与えてくれました。お茶会に参加することができ、良い経験になりました。

（帝京大学文学部史学科四年 荒井涼花）

私は今回行われた辻清明茶会において、茶会場で用いられる掛軸の解説文の制作、案内状制作の支援、茶会当日の作業に従事させていただきました。これらの作業に従事できたことは私にとって貴重な経験となると同時に大きな自信を得ることにつながったと考えています。

この実習にて茶会を催すということを知った当初、ここまで多彩で貴重な作業に従事することになると考えていませんでした。当初、私は役割を果たすことに大きな不安がありました。自分に与えられた役割に対する知識がなく、役割を果たすことができるか不安がありました。しかし、いざ準備を始めてみると先輩方の的確な指導によって当初抱いていた不安は自信となりました。その姿勢は人の上に立つ者のあり方を示していたように感じられました。

私は、今回の茶会に関する準備、実際に茶会を執り行う中で多くの学びがあったと強く感じています。特

に茶会場で飾られる掛軸の説明文を構成し、それを用いて実際に説明を行ったことは私にとって多くの学びを得られるものでした。茶会の方は静謐で濃密な空間であり、そのような空間で説明を行うことは今までに経験したことのないものでした。さらに説明は客人との会話のような形で行われるため、聞き手に寄り添った柔軟な説明を行う必要がありました。

説明文の構成を考える際には至らない箇所が顕著に表れました。また、論文など厳密さが要求される文章を書く時に必要な要素についても新たな知見を得ることができました。

辻清明茶会に参加できたことは、今後長きにわたって私の中で大きな意味を持つものになると強く感じています。それと同時に、この茶会に従事する中で、共に働き結束を強めた仲間と辻清明茶会を企画した岡部昌幸先生に対する尊敬と感謝の念に堪えません。

（帝京大学文学部史学科二年 古木翼）

注

(1) 詳しくは『帝京史学』バックナンバーおよび『卒業への道しるべ―卒業論文&先輩からのメッセージ―』の「美術史プロジェクト報告書」「大学教育と地域貢献」等をご参照いただきたい。

(2) ご令室・辻協（一九三〇～二〇〇八）は女性で初の日本陶磁協会賞を受賞している陶芸家。

茶室と掛け軸の解説を行う小山将嗣さん
（当時学部三年生）「虹の茶会」



「虹の茶会」での一服



「ひなげしの茶会」の点前



登り窯を解説していただいた辻文夫さん（左）
「ひなげしの茶会」

